# 天井裏から
# どうぞよろしく1

くるひなた
Hinata Kuru

RB
レジーナ文庫

少女のお供
◀ボスネコ
▲子グマ
少女の義父▼
南の公爵
帝国の大貴族。
有名な好色漢で
愛人もいっぱい。
天井裏の密偵達
皇帝執務室の天井裏で
諜報活動を行う中高年達。
宰相
皇帝の二歳年上の叔父。
冷静沈着で少し皮肉屋。
皇帝のよき理解者だが……？
参謀長
皇帝、宰相の幼馴染。
皇帝に忠誠を誓う。
表情に乏しく、お堅い。
登場人物紹介
皇帝（23歳）
五十以上の属国を従える帝国の
統治者。周りから次々縁談を
持ち込まれてうんざりしている。
少女（17歳）
帝国の属国より派遣された密偵。
天井裏で皇帝陛下を監視していた
だけのはずが、何故か皇妃候補に。

# 目次

天井裏からどうぞよろしく1　7
書き下ろし番外編
隠した宝をどうぞよろしく　369

天井裏からどうぞよろしく１

# 第一章　天井裏からどうぞよろしく

「ふわぁ～……」

よく晴れた日の昼下がり。

容赦なく襲いかかる睡魔から逃れられず、少女はついに大欠伸をしてしまう。その途端、隣にいた男からポコンと一発脳天に拳骨を食らった。

「たるんでいるぞ、チビ！」

「ご、ごめんなさい……」

チビと呼ばれた少女は慌てて両目を擦ると、その場に腹這いになって下を覗き込んだ。

ここは、とある天井裏である。

下階の天井板と上階の床板の間という限られた空間。横には広いが、大人がまっすぐに立ち上がろうとすると途中で上に頭を打ってしまい、窮屈なことこの上ない。

周囲に広がるのは、先のほとんど見えない闇。採光口となるのは、換気のために外壁



に設けられた小窓のみ。そこからわずかな陽光が射し込んでいる。

そんな居心地がいいとは言えない場所で、足元の天井板に空けた小さな穴から、下の部屋にいる人物をこっそり監視するのが少女の仕事だ。

彼女の全身を包むのは、闇に溶け込む真っ黒い衣服。頭部と顔を黒い布で覆い隠し、見えているのは目元だけという恰好である。

少女は、密偵だった。

かつて、その大陸は混沌としていた。

多くの小国が乱立し、互いに小競り合いを繰り返して、いつしか戦争が慢性化していたのだ。

各国の支配者達はいかに他国を出し抜くかばかりに躍起になり、国の中のことなど碌に顧みなかった。国防を理由とした彼らの搾取に民は疲れ果て、その顔からは生気が抜け落ちていく。どの国も確実に滅びの道を歩んでいた。

そんな中、ただ一つ躍進を続ける国があった。

それは比較的歴史の浅い新興国家であったが、抜群の統率力とカリスマ性を誇る君主が自ら軍を率いていた。その勢いはとどまることを知らず、次々に周辺諸国を制圧して

領土を広げ、彼の国はやがて〝帝国〟を名乗るようになった。
そして今から七年前、大陸中の国々を巻き込む、一際大きな戦争が起こる。
帝国皇帝陛下も、立太子されたばかりの一人息子を連れて参戦した。
王侯貴族ばかりが肥え、民の疲弊し尽くした末期状態の小国などは、勢いづいた帝国軍の前には為す術もない。この戦争で多くの血が流され、数え切れないほどの家が焼かれた。
しかし、制圧された国々において、帝国の評判は意外にも悪くはなかった。
帝国皇帝陛下は、無抵抗な民には一切手を出さず、自国の兵士達にも極力略奪をさせなかった。そればかりか、その国の王侯貴族が不当に貯め込んでいた食糧を見つけては、惜しみなく飢えた民に分け与えたのだ。それ故、帝国皇帝陛下を〝救世主〟とたたえる声もあったほどだ。
この大戦で帝国の属国となった国は、二十余り。
それまで傘下に収めていた国々と合わせ、五十余りの属国を抱えることになった帝国は、大陸一大きな国家となった。

「油断するんじゃないぞ。我らの標的は、若造ながら先代に匹敵する武人と聞く。気を



緩めれば、お前の気配などすぐに悟られてしまうぞ」
「はい、とと様」
少女を叱りつけたのは、とある属国の諜報部隊の幹部で、孤児であった彼女を引き取り密偵として育てた男だ。血の繋がりはないが、少女は彼を「とと様」と呼ぶ。
多くの国々を平定してきた帝国皇帝陛下が、あっさりと玉座を息子に譲って三年。
男は、その新皇帝を即位直後より監視しており、一年ほど前からは少女も見習いとして仕事に同行させていた。
監視対象である現帝国皇帝陛下は、黒髪と琥珀色の瞳を持つ、二十三歳になったばかりの美丈夫である。彼は剣を携え大陸中を飛び回っていた先帝陛下とは違い、戦よりも政に重きを置いた。これまでの慣例通り、軍最高司令官も兼ねてはいるが、軍部の実権は先代の側近でもあった総司令官に委ねている。
また彼は属国に対し、帝国から派遣する総督の指揮のもと国家を再建することを条件に、現地の有力者による自治を認めた。それらの属国の中には、帝国の侵攻をきっかけに奮起した民が、圧政を敷いていた王侯貴族から政権を奪った国もあるが、その場合は国民の代表に一定の権限が与えられた。
また、各国固有の宗教や法制度、生活習慣の保持を許すなど、帝国の支配は実に平和

的なものであった。
しかし各属国、特に大戦後に組み込まれた新参国は、新皇帝陛下の力量をいまだ測りかねていた。
何しろまだ若い。それ故気まぐれにおかしな政策を打ち出さないとも限らない。そうなった時に自国を守るため、あるいは反旗を翻すためにも、属国はそれぞれ諜報活動に力を入れていた。
その要とも言えるのが、少女とその養父がいるこの場所。
帝国皇帝陛下の執務室――の、天井裏であった。
「捕えられた密偵の末路は悲惨だぞ。だいたいお前は……」
少女の身を案じるが故に、養父はなおも説教を続けようとした。
彼には、同じく密偵として活躍する実の息子が三人もいるが、一番年下で一番手のかかったこの養女がいっとう可愛いらしい。
少女が眉を八の字にして説教を聞いていると、「まあまあ」と誰かが口を挟んだ。
「そうカリカリしなさんな。こう毎日平和では、欠伸の一つも出るってもんですわ」
「おや、これはどうも。今日は重役出勤ですな」
声をかけてきたのは、少女やその養父と同じく、全身黒ずくめの人物だ。声の様子か



ら、少女の養父よりもいくらか年嵩の男と知れる。
男は屈めた腰をトントンと拳で叩きながら、笑って言った。
「いやあ、最近どうにも腰の調子が悪くてねえ。わしもそろそろ引退ですかな」
「いやいや、何をおっしゃる。まだまだ、お若いじゃありませんか」
そう言って笑い合う男達だが、決して相手の名前を呼ぼうとしない。
何故ならこの場に集うのは、少女とその養父同様、帝国皇帝陛下の動向を探るために送り込まれた密偵ばかりだからだ。
目を凝らしてよくよく見渡せば、暗闇の中、黒装束姿が幾つも蠢いている。
彼らはお互いがどこの国の者なのかも知らない。
薄暗い天井裏、ましてや覆面で顔は隠され、布で覆われた口から聞こえるのはくぐもった声。
帝国皇帝陛下の執務室の天井裏では、様々な国から派遣された密偵達がひしめき合い――実に平和的な交流を重ねていた。
「どうです？　一杯やりませんか」
新たな密偵が一人、小振りのボトルを抱えて少女達の方にやってきた。
それを皮切りに、そこかしこから黒ずくめの連中がわらわらと集まってくる。

「あ、いや、さすがに勤務中に麦酒は……」
「ご心配なく。味はしっかり麦酒ですが、酒精は入っていないんですよ」
「おお、それならばご馳走になります。いやぁ、いいものができましたなぁ」
「まったくですなぁ」
わっはっはっと声を潜めて笑い合う器用な密偵達は、働き盛りの中高年。
盛り上がるオヤジ達の輪ににじり寄り、少女も麦酒もどきのボトルに手を伸ばした。
ところが、すんでのところでボトルは別の手に奪われ、彼女の掌は虚しく宙を切る。
「おっと、おチビちゃんはいかんぞぉ。こいつは大人の飲み物だ」
「どうしてですか？　酒精が入っていないのなら、私だって飲めます」
帝国の法律では、子供の健全な成長を促すという観点から、未成年――十八歳未満の飲酒が禁じられている。
少女は現在十七歳。未成年ではあるが、酒でないならば飲んでも問題ないはずだと、ボトルを取り上げた密偵に向かって唇を尖らせる。と言っても、布で覆われた唇では相手に分からなかったかもしれないが……
「味は麦酒のまんまだからなぁ。若ぇうちからこの味を覚えちゃなんねえ」
「おチビちゃんは、こっちな。早く大きくなれよぅ」



オヤジ達はそう言って笑うと、むくれる少女に別の飲み物が入ったビンを手渡した。牛の乳から作られた、白くて甘い乳酸菌飲料である。
少女は不満げな顔をしながらも、覆面の脇からビンの飲み口を突っ込み、悔し紛れにそれを豪快にあおった。
「ぷははっ！　おチビちゃん、いい飲みっぷりだねぇ！」
「もうちっと大人になったら、おじさん達と乾杯しようなぁ」
不貞腐れて乳酸菌飲料を飲む少女の姿に、密偵達はまたヒソヒソ声で盛り上がるという器用な芸当をして見せた。この天井裏で紅一点の少女は、オヤジ達のマスコット的存在だ。
「――おおっと？」
その時、下の部屋で動きがあった。
それに気づくと、密偵達は一斉に足元の天井板に貼り付き、それぞれが確保した覗き穴に片目を押し当てた。少女も慌ててそれに倣う。
すると、誰かがぷっと小さく噴き出して言った。
「おやおや、皇帝様もやさぐれておりますぞ」
その言葉通り帝国皇帝陛下は、たった今宰相閣下が置いて行った紙の束を、執務机の

上から乱暴に叩き落としていた。そして「くそっ……！」と、その麗しさに似合わぬ悪態をつくと、椅子から立ち上がって床に散らばった紙を睨みつける。

「ああ、姿絵かぁ。大変ですなぁ、大帝国の皇帝様も」

「あの方もそろそろいい年です。宰相閣下が皇妃を娶れとうるさいんでしょう」

皇帝が床に叩き落としたのは、妙齢の女性の姿絵――いわゆる見合い写真のようなものだった。

大帝国に君臨する若き皇帝陛下はいまだ独身で、国内外を問わず多くの女性がその皇妃の座を狙っている。属国の王は自国の王女や貴族の娘を差し出して、何とか帝国に取り入ろうと躍起になり、帝国の貴族もまた、あわよくば次の皇帝の外戚になろうと、しきりに自分の娘を薦めてくる。

そんな下心丸見えな相手にばかり迫られるなど、皇帝陛下も気の毒なことだ――と、天井裏の密偵達からは同情の声が集まっていた。

「おっと。標的が移動しますぞ」

散らばった姿絵を拾うどころか踏みつけて、皇帝は執務机を離れて歩き出した。そしてそのまま、執務室の奥の小部屋――天井裏からは死角になる場所へと姿を消す。

そこは、いわゆるお手洗いであった。

「用足しですかい」
「我々はしばらく休憩ですな」
手洗い場は不可侵というのが密偵達の間の暗黙の了解だった。つまり、皇帝がそこに入った時は、絶対に覗かないことになっているのだ。
「ハバカリの時くらい気を抜かしてやらねえと、皇帝様も参ってしまいますからなぁ」
「では、皆さん。監視対象が戻るまで一局やりますか」
「おっ、いいですねぇ」
誰かが碁盤（ごばん）と碁石を取り出して誘うと、誰かがそれに乗った。あとの者は、再びボトルに口をつけて、話に花を咲かせ始める。
何故なら、皇帝は用足しの時間が長いのだ。一時間ほど手洗い場にこもっている時だってある。
大国を背負う重圧が心理的負担となって、毎日のお通じに悪影響を及ぼしているのだろうか。
少女はそんな風に考え、帝国皇帝陛下に対する同情を深めるのだった。

「――よう」



「あ、こんにちは」
密偵達が盤遊びや歓談に興（きょう）じ始めてからしばらくして、新たな人物が天井裏に加わった。
その人物は音も立てずにやってきたが、少女には近づいてきた者がいることも、それが誰なのかもすぐに分かった。少女はのほほんとしているように見えるが、密偵としてはベテランの養父でさえ一目置くほど優秀なのだ。
馴染みの人物と知って彼女が慕わしげに目を細めると、その頭に相手の手がポンと置かれた。
新たにやってきたその人も、他の連中同様、黒ずくめの上に覆面で顔を隠している。だが、布越しに聞こえる声は若い男性のもの。少女を除けば密偵達の中で一番若いのではなかろうか。
一年前に少女が見習いとしてやってきた時には、すでに彼もこの天井裏に出入りしていた。
その彼に、ボトルを持った密偵が陽気に声をかける。
「おお、いいところに来なすった。お前さんも一杯やらないかい？」
「麦酒か？　仕事中に酒盛りとは感心しないな」

「いやいや、酒精はほとんど入っちゃいねぇんですわ。酒税から逃れるために考案された逸品さぁ」
「へえ、そんなものが……？　だったら、遠慮なくいただくよ」
男はボトルを受け取ると、覆面の隙間から飲み口を突っ込んでぐいっとあおる。すると彼はすかさず「うまい」と頷いた。
「これなら、仕事をしながら飲んでも問題なさそうだな」
「そうともさ」
がははと笑うオヤジ密偵に礼を言い、男はボトルを片手に少女の方に向き直る。そして、彼女の手にもビンが握られていることに気づくと、片眉を上げて問うた。
「お前も飲んでいるのか？」
しかし、少女の手ごとビンを掴んで中を覗き見た男は、彼女が答えを返す前に面白そうな声で続けた。
「ああ、なんだ、ミルクか。お子様だからな」
「子供じゃありません！　もうすぐ十八です！　それに、ミルクじゃなくて、お腹に優しい乳酸菌飲料ですっ！　本当は私だって、皆さんと同じものが飲みたかったのにっ……」



少女が覆面の下で頬を膨らませると、男はくつくつと笑いながらまた彼女の頭を撫でた。
彼は、よくこうして少女をかまう。一番年下で、密偵としても一番新米である彼女のことを、他の密偵達同様、随分と可愛がっているのだ。
時には、珍しいお菓子や本、流行りの装飾品などを差し入れしてくれることもある。
今は覆面と黒装束に隠れているが、以前彼がくれた小さな緑色の石のピアスとネックレスは少女のお気に入りで、肌身離さず身に着けている。
そんな贈り物をくれる男に対し、少女の養父は最初、「無闇にチビの物欲を育ててくれるな」と言って難色を示した。相手が他国の密偵だから警戒したというのもあるし、若い男が自分の娘にせっせと貢いでいる姿にも、複雑な思いを抱いていたのかもしれない。
しかし、彼に下心がないと判断したのか、あるいは少女の喜ぶ顔に絆されたのか、やがて養父はそれを黙認するようになった。
男は不貞腐れる少女に目を細めつつ、自らの懐に片手を突っ込む。そして、そこから取り出したものを少女の目の前に差し出して言った。
「では、もうすぐ大人の女性の仲間入りをするお前にふさわしいものをやろう」

「わっ、何ですか？　――髪飾り!?」
男がこの日持参したのは、緑色の石があしらわれた髪飾りだった。
緑色の石は翡翠。これまでもらったピアスとネックレスに付いていたものと同じであることが、覗き穴から漏れるわずかな光で分かる。
小さくても宝石の付いたものはやはり高価なので、少女は最初手を伸ばすのをためらった。
しかし、彼女だって綺麗なものや可愛いものには、年相応に興味がある。少女は養父が盤遊びに夢中になっているのを確認すると、そわそわした様子で男を見上げて問うた。
「……本当に、いただいてしまっていいんですか？」
「お前にやると言っただろう。二言はない」
男はそう答えて彼女の片手を掴み、その翡翠の髪飾りを握らせた。
とたんに、暗闇の中にもかかわらず、少女の両の瞳がぱああっと明るい光を帯びた。
「ありがとうございます！　大切にしますっ！」
嬉しくて仕方がないとばかりに、まっすぐに喜びを伝えてくる少女に、男は眩しそうに目を細める。そして、覆面の上部分――彼女の髪を覆い隠している布を優しく撫でて言った。



「お前の髪は、陽の光のもとではどんな色をしているのだろうな。できることなら、それを髪に飾った姿を見たいものだが……」
「あの、それは……」
「ああ、すまない。独り言だ。聞き流してくれ」
「はい……」
他国の密偵同士が覆面を取り、明るい場所で相見えることはない。
だから、せっかく綺麗な髪飾りをもらったのに、それを着けた姿を彼に見てもらうことは不可能なのだ。少女には、それがひどく残念に思えた。

皇帝はまだ手洗い場から戻ってこない。無人の執務室の床には、先ほど皇帝が払い落とした姿絵が散らばったままだ。
それを覗き穴から見下ろしながら、誰かが「そういえば」と口を開いた。
「昨日、後宮担当だった奴と飲んだんですがねぇ。あっちはもう空き家になっているらしいですよ」
王城の奥には、歴代の皇妃やその候補達が暮らしてきた後宮がある。少し前までそこには、皇妃候補として、帝国の貴族の令嬢や周辺諸国の姫達が何人も住んでいた。

ところがこの一年の内に、彼女達には次々と暇が出された。そして先日ついに全員が生家に帰されてしまったというのだ。

表向きは、古くなった後宮の改修工事のための立ち退き。しかし実際は、皇妃候補である娘達の中に、皇帝の心を掴める者がいなかったからに違いない――天井裏の密偵達はそう思っていた。

密偵達は覆面をかぶった頭を寄せ合い、口々に言った。

「大陸中の綺麗どころが集まっても、あのお方のお眼鏡に適う者はいなかったというわけですか」

「まったく、どういったおなごが好みなんでしょうなぁ。皇帝様は」

「まさか、日頃の激務のせいで枯れちまったってんじゃないでしょうね？」

「うはぁ！　そうだとしたら、まだ若ぇのに気の毒な話ですなぁ！」

などと、皇帝執務室が無人なのをいいことに、その天井裏は勝手な推測でまたわいわいと盛り上がる。

「こりゃあ、宰相殿が皇帝様に嫁取りさせようと躍起になるわけですな」

「とにかく皇妃の座だけでも埋めてしまわないとねぇ。そのうち世継ぎの問題も出てくるでしょうから」



おそらく宰相も、皇帝が後宮を空にした理由を同じように考えているのだろう。世襲制を採る帝国では、跡継ぎを作るのも皇帝の重要な責務である。

異性関係にまで口を出される皇帝も大変だが、そうせざるを得ない宰相も大変だ、と密偵達は現在帝国を担う二人の男に大いに同情した。

そんな中、先ほど出てきた〝嫁取り〟という言葉に反応し、おずおずと口を開いた者がいた。あの、少女の密偵だ。

「あ、あの……」

「おう、どうした、おチビちゃん」

天井裏に響いた紅一点の声に、一同の注目が集まった。

少女は今日、この場所に集う者達に伝えなければならないことがあったのだ。

「実は……私、今日を限りに異動になるんです」

「――えええっ!!?」

少女の突然の告白に、密偵達は一斉に驚きの声を上げ、思わずその場で立ち上がろうとした。しかし、揃って上階の床にゴツンと頭を打ち、アイタタタ……と、仲良く頭頂部を押さえて身悶える。

そんな中、さっき天井裏に加わったばかりの若い男が硬い声で問うた。

「異動って……いったいどの部屋に？」
「いえ、それが……城での諜報活動から外れ、とあるご貴族様の愛人になることが決まりました」
「――何だと⁉」
男は語気鋭く言った。他の密偵達も、こぼれんばかりに両目を見開いて絶句している。
少女は気まずそうにしながらも、さらに続けた。
「私、あと半年したら成人するんです。それまでに床の技術を学んで、誕生日から新しい職場に異動します」
「と、床ぉっ……⁉」
「房中術を学ぶってことかい？　お、おチビちゃんがっ……⁉」
密偵達がそう言ってどよめき立つと、それまで口を噤んでいた人物が吠えた。
「おおうっ！　くそうっ……‼」
少女の養父である。
彼は、祖国から帝国に派遣されている密偵達をまとめる立場にあるため、上層部から少女に下された新たな命令についても当然把握していた。
女の密偵が情報を得るには、愛人として標的の屋敷に潜入するのが最も手っ取り早い。



閨の中でなら標的も油断することが多いからだ。それは、養父も頭では分かっていた。
しかし、少女が妾入りすることになった貴族は大変好色と有名な男で、すでに多くの愛人を囲っている。手塩にかけて育てた愛娘をそんな相手にやらなければならない養父の心中は、当然穏やかではない。
「よりにもよって、あんな脂ぎったじじいにチビをやることになるなんてっ……！　うちのボスは、鬼だ！　悪魔だ！　人でなしだ！」
先ほどまで、これも密偵の定めと思い平静を装っていた養父が、ついに感情を爆発させる。
「とと様、だめですよ。ボスは地獄耳だから聞こえちゃいますよ」
「うるせぇ！　聞こえたってかまいやしねぇ！　そもそも、あんなスケベじじぃ相手に成人前のお前の姿絵を送りつける時点で、ボスの頭ン中は腐ってる！」
「きっと、相当美化した姿絵を送ってくださったんでしょうけど……でもまあ、目に留まっちゃったんだから仕方がないですよ」
「お前は、何をのんきに……」
声を震わせる養父とは対照的に、少女は意外にもけろりとしていた。
「大丈夫ですよ。他にも愛人がいっぱいいるから、そう頻繁に夜のお相手をすることも

ないだろうって、ボス言ってましたし……」

彼女が無邪気に笑ってそう告げると、ついに養父はわああっと顔を覆って泣き伏した。

「父親ってぇのは辛ぇもんですなあ、おやっさん……」

そんな彼の肩を抱いて、密偵仲間達も揃ってほろりともらい泣き。

そこへ麦酒もどきを持ってきた密偵が、ぐしぐしと手の甲で涙を拭いながら、新しいボトルを少女の養父に差し出した。

「どんどん飲みなせぇ、おやっさん！」

「こうなったら、気持ちよく酔って、おチビちゃんの門出をパーッと祝ってやりましょうや！」

「と言っても、酒精は入ってないんだけどねぇ」

すっかり湿っぽくなってしまった天井裏で、少女は居住まいを正す。そして、この一年をともに過ごしてきた密偵達に向き直り、黒い布で覆った頭をペコリと下げて言った。

「皆さん、短い間でしたがお世話になりました」

密偵達は、「寂しくなるなあ」「元気でな」とますます涙ぐむ。

そんな中でたった一人、あの若い密偵の男だけが鋭い目をして宙を睨んでいた。



翌日の早朝、少女は帝国を出発した。

祖国に帰って、半年間愛人としてのノウハウをみっちり学ぶためだ。

そんな彼女は現在、密偵姿を改め、膝下丈のシンプルな長袖ワンピースの下に、踝できゅっと絞ったズボンを穿き、頭には大判のショールを頭巾のようにして被っている。それは、この大陸の女性の一般的な普段着であった。大戦が終結して現在の皇帝が玉座についてから、帝国のみならず属国の治安も随分と良くなって、女がそんな格好で一人旅をしていてもそれほど危険ではない。

ともあれ少女にとっては一年ぶりの帰国である。祖国までの道中、少女は久々に顔を合わせることになる諜報部隊のボスや幼馴染のために、じっくりと土産物を物色する。あちこちの店を散々見て回り、少女の目に留まったのは、もらっても置き場所に困りそうな不格好なネコの置物と、灰色をした地味なネズミのブローチ。彼女は迷わずそれらを購入した。

帝国から少女の祖国まで、うまく乗合馬車を乗り継げば二日もかからない。

ところが、土産物選びのために乗り継ぎの馬車を一つ二つ見送った少女は、結局まる三日かけて帰国することになった。ボスからは厳密に帰国日を指定されていなかったとはいえ、随分と余裕である。

そもそも彼女は周囲が嘆くほど、自分の人生を悲観してはいないのだ。

確かに、半年後に嫁入りならぬ妾入りする相手が養父よりも年上で、ライバルの愛人がたくさんいるというのは嬉しい話ではない。

しかしながら、貴族の屋敷で自分専用の部屋を与えられる上に、三食昼寝付きという好条件。こんなおいしい話はそうそうないだろう。夜のおつとめに関しては、いかんせん未経験のためまったく自信はないのだが、玄人のお姐さんの手ほどきを半年も受ければ何とかなると楽観視していた。

祖国に到着すると、少女はまず自らが所属する諜報部の長のもとへ向かった。

彼女のボスは、軍司令官を務める第二王子。妾腹のため以前は随分軽んじられていたが、敗戦によりすっかり萎縮した父王と兄王太子に代わって、帝国から派遣された総督と交渉し、さらには少女やその養父のような密偵を使って、諜報活動も行っている。

少女の祖国は、先の大戦で帝国に敗北し、その傘下に入った。属国としては、いわば新参者であり、当然帝国に対する発言権も弱い。だからこそ、密偵を使って帝国皇帝陛下の動向に目を光らせ、少しでも自国に有利になる情報を集めたいのだ。

「――失礼します、殿下。ただ今戻りました」

少女が執務室を訪ねると、もともとあまり血色の良くない第二王子の顔が、いつにも



増して青かった。それを心配しつつ、少女はまず、お土産にと買ったネズミのブローチを差し出す。すると、第二王子は可愛い部下の気遣いに感謝するどころか、ますます顔色を悪くした。

養父が彼を恨んで、連日連夜ワラ人形に五寸釘を打ちつけていたのを知っていた少女は、もしかして呪いが効いて腹でも下しているのだろうかと首を傾げた。

ところがそんな彼女を前に、第二王子は驚くべきことを告げた。

「――え？　潜入先が変更……ですか？」

「そうだ。それに、急遽時期も早まった」

「ええ？　半年後ではなくてですか？」

「今すぐ、だ。……実は、あちら様からはすでにお迎えが来ている」

突然のことに、楽観主義の少女もさすがに戸惑った。そもそも、技術も会得しないまま標的の懐に飛び込んだところで、充分な仕事をする自信はない。

「お床のお勉強がまだです」

少女は、心底困ってそう訴える。

すると、第二王子とは別の声がそれに答えた。

「心配するな。閨でのことなら私が教えてやる」

「――え……？」
どこかで、聞き覚えのある声だった。
少女が慌てて辺りを見回すと、奥の扉が開いて一人の若い男が現れた。
その男の姿にも、彼女は見覚えがあった。
それもそのはず。
男はこの一年、少女が天井裏からこっそり眺め続けた相手――帝国皇帝陛下、その人だったのだ。
少女は思わず、顔色の悪い第二王子の胸ぐらを掴んで揺すぶった。
「あ、あわわわわっ！　で、殿下っ……!?」
「……お前が嫁入りするのは、この方のもとだ」
「え、えええええっ――!?」
揺すぶり過ぎてふらふらになった第二王子の胸ぐらから手を離し、少女は思わぬ展開におののき後ずさる。
ところが、皇帝は瞬く間に距離を詰め、小柄とはいえもうすぐ成人を迎える少女を、子どものように軽々と抱き上げてしまった。少女が驚いて彼を見れば、今までは高い場所から見下ろすばかりだった端整な顔が、少女のすぐ近くで柔らかく綻ぶ。



「成人の祝いが済んだら、麦酒だって飲ませてやる」
「……え？」
「もちろん、酒精も入った本物の麦酒だぞ」
「――っ!?」
「もうすぐ、子供扱いされて不貞腐れることもなくなるな？」
「ど、どうしてそれを……？」
まるで、三日前の天井裏での出来事を知っているかのような皇帝の言葉に、少女はひどくおののいた。
しかし、彼の目を見た少女は、その時はたと気づく。
「あ、あなたは……まさか……」
天井裏から見た皇帝は、書類に視線を落としていることが多く、その表情や眼差しを正面から眺めることはできなかった。それなのに、こうして間近で相対した彼の涼やかな目元、そして自分に注がれる優しい視線に、少女は強い既視感を覚える。
「お前の髪は、明るい色だな」
そう言う皇帝の髪の色は、あの天井裏の暗闇を彷彿とさせる黒である。
彼の片手が少女の明るい栗色の髪をさらりと撫で、次いでそれを彩る装飾品にそっと

触れた。

「瞳は、石と同じ色だったのだな。よく似合っている」

それは三日前のあの時、若い密偵の男が少女にプレゼントしてくれた翡翠の髪飾りだった。

「あの……この髪飾りを下さった方は……陛下？」

少女は、翡翠によく似た緑色の瞳を戸惑いに揺らしながら問う。

すると皇帝は、口の端を持ち上げてにやりと笑った。



## 第二章　改めましてどうぞよろしく

話は、少女が祖国で帝国皇帝陛下と再会（？）した、二日前の朝まで遡る。

少女が祖国を目指し、帝都の外れから一台目の乗合馬車に乗り込んだ頃、帝国皇帝陛下は自らの愛馬に跨がり城の大門を飛び出していた。

その後を追うのは、帝国の参謀長である。

「陛下、お待ちください！　いったい、どちらへ？」

焦げ茶色の髪と青い瞳を持つ参謀長は、帝国軍総司令官の息子である。二つ年下の皇帝とは幼い頃から兄弟のように育っており、その忠誠心は誰よりも厚い。同じく幼馴染の宰相とともに若き帝国皇帝陛下を支え、彼の外遊の際には常々護衛として付き従っている。

そんな忠臣に対し、皇帝は振り返りもせず告げる。

「大事なものを貰い受けに行くのだ。詳しいことは、おいおい話す」

仕事熱心な皇帝が公務をさぼって城を飛び出すなどただ事ではない。

そう感じた参謀長は自らも馬に乗り、飛ぶように駆けていく主人の愛馬の尻を必死に追いかけた。

彼らが少女の祖国に入ったのは、出発した日の翌日、正午前だった。

腑に落ちない様子の参謀長を引き連れ、皇帝はまっすぐにその国の城を訪ねる。

しかし、慌てて出迎えた老王は真っ青になって狼狽えるばかり。父親と同じく敗戦のショックで萎縮してしまった王太子も話にならない。

皇帝は帝国から派遣していた総督に案内され、現在この国の実質的な統治者である軍司令官――諜報部の長を務める第二王子に面会した。

「このような田舎に、わざわざ足をお運びいただきありがとうございます」

相変わらず顔色のよくない第二王子だが、父王や王太子よりはよっぽど冷静だった。

皇帝はソファに腰を下ろし、帯剣したままの参謀長がその脇に立つ。

「それで、この度はどういったご用件でございましょうか？」

第二王子がそう問うと、皇帝は長い足を組み、抑揚のない声で告げた。

「私の執務室の天井裏に、貴様が放ったネズミがいるらしい」

「はて、陛下。何のことか、わたくしにはさっぱり……」

密偵について白を切ろうとする第二王子を、参謀長は冷たく睨み据える。



王城に他国の密偵が紛れ込んでいることは、参謀長とて把握していた。

実のところ、帝国内にも彼らを逆に監視する機関がある。だがそれは軍部以外の機関であったし、何より密偵達が皇帝に危害を加える気配がないため、参謀長も手出しはしなかったのだ。とはいえ、彼らの存在はずっと不快に感じていた。

参謀長の鋭い瞳は、しかし次の瞬間、困惑に染まる。

「二匹のうち、子ネズミの方を私に譲れば、この度のことは不問といたす」

「――陛下？」

突然皇帝より提示された取引に、参謀長は思わず声を上げた。

しかし、皇帝は気にせず続ける。

「その子ネズミ、年老いたタヌキのベッドにやるには惜しいとは思わんか？」

「……」

子ネズミにもタヌキにも心当たりのある第二王子は、ぐっと押し黙った。

皇帝はすでに密偵の存在を知っている。白を切り通せるような生易しい相手ではないことを悟った第二王子は、潔く観念するほかなかった。舌打ちしたくなるのを必死にこらえ、なるだけ申し訳なさそうな態度を装う。

しかしながら、転んでもただでは起きない第二王子は同時に、今度は少女という駒を

どれだけ有効に使えるかを思案し始めた。
「すぐに、親の方を回収いたします。子の方は……陛下のベッドで飼っていただけるのですか？」
若き皇帝陛下は、そんな彼の思惑を嘲笑うように、両目を細めて告げる。
「親ネズミの方は、このまま天井裏に放っておこうと一向にかまわん」
「え……？」
属国の思惑など、帝国皇帝陛下はすべてお見通しなのだ。
天井裏にひしめく密偵の存在を知りつつも好きにさせているし、これからも好きにさせてやると言っている。つまり彼は、属国に情報を奪われたくらいでは帝国はぴくりとも揺るがない、と示唆しているのだった。
「ただし、帝国に向けるものが視線から刃に代われば――その時は、切っ先がこちらに届く前にこの国を焼け野原にしてくれる」
「……」
第二王子は、皇帝の琥珀色の瞳からあふれる気迫に圧倒され、息を呑んだ。鬼神のごとしと恐れられた先帝に比べれば、理知的で穏やかな印象の現皇帝だったが、鬼の子はやはり鬼であった。



「子ネズミは私が譲り受ける。貴様は黙って、あれに関するすべての権利を放棄せよ」
「……仰せのままに」
第二王子は頭を垂れ、せめて声が震えないよう努める。
これにて少女がその身を捧げる相手は、帝国貴族の好色爺から今をときめく若き皇帝陛下へと変更された。
当の少女は、それが決まった翌日の午後、祖国に到着した。そしてそのまま、買い込んだ土産を第二王子以外に配る暇もなく、皇帝陛下の膝の間に座らされて帝国へとんぼ返りすることになったのだった。

祖国を出発した次の日。
夜の帳が下りる頃には、少女は馴染みの深い場所――帝国の皇帝執務室に帰ってきていた。
と言っても、一年間毎日見下ろしてきたこの部屋に足を踏み入れるのは、これが初めてだ。
きょろきょろと、好奇心を隠し切れない様子で辺りを見回す少女にソファを勧め、皇帝もその隣に腰を下ろす。そして天井を見上げて言った。

「天井裏では、ネズミ達がさぞ驚いていることだろうな」
「ネズミ？」
少女も皇帝に倣って振り仰ぎ、白い天井に意識を集中してみた。天井裏には彼女の養父をはじめ、各国から派遣された密偵達が今もいるはずなのだ。
しかし、少女がどれほど神経を研ぎ澄ましても、彼らの気配を感じ取ることはできなかった。
「とと様、皆さん、さすがです」
少女はそう言って感嘆のため息をつくと、天井に向かって笑顔で両手を振った。

「ああ、おチビちゃん、おかえりっ……！」
「いやぁ、よかった！　よかったですなあ！」
その頃天井裏では、興奮した密偵達が気配を隠すのに苦労していた。
四日前に別れを惜しんだ少女が、彼らの標的と並んでソファに座っている。
その服装は、帝国を発った時に着ていたような、シンプルな長袖のワンピースと踝まで隠れるズボンであった。しかし、皇帝の膝の間で馬に揺られてきた帰り道、激しい向かい風を防いでくれたショールともども、生地はずっと上等なものになっていた。それらは、帝国と祖国の間で翻弄される少女への、第二王子からのせめてもの餞別だった。
彼女の養父以外の密偵達は、少女のそんな娘らしい装いをこの時初めて目にした。
しかも、覆面を取り去り素顔を晒した彼女は、天井に向かって無邪気に手を振っているではないか。その姿をそれぞれの覗き穴から見下ろし、密偵達は揃って目尻を下げた。
「それにしても、なぁんてかわゆいのだ」
「どこの国のお姫様かと思いましたなぁ」
少女の髪が柔らかそうな栗毛で、その瞳が翡翠のようにきらきらした緑色であることも、密偵達はこの時初めて知ったのだ。
一方、少し前に祖国よりこの嫁入りについて連絡を受けていた少女の養父は、娘を褒められて鼻が高い。
「いやいや、とんだ田舎娘で。皇帝様の豪華な執務室では浮いてしまってお恥ずかしい限りですよ」
口ではそう謙遜しながらも、心の中では「天下の皇帝陛下と並んでも、うちのチビは見劣りなんてするもんか！」と親ばか丸出しなことを考えていた。
「おやっさんも、人が悪い。あんな可愛い子にずっと覆面を被せていただなんて」
「まあ、そのおかげで、これまで悪い虫が付かずに済んだんでしょうなぁ」

密偵達はそう言い交わし、少女が自分達の目の届くところに戻ってきたことを大いに喜んだ。

それに、彼らが喜ぶ理由はもう一つあった。

「それにしても、最終的にはデッカい虫に攫われてしまいましたなぁ」

「まったくですな」

密偵達の視線は、少女と並んでソファに座った帝国皇帝陛下へと注がれる。

彼らは、もうずっと前から知っていたのだ。

自分達の監視の対象である皇帝が、時々密偵に扮して天井裏にやってくることを。

最初は、密偵達の動向を自ら探ってやろうとして忍び込んだのかもしれない。

しかし次第にその目的が、政務の合間の息抜き、あるいは偏屈な年寄り貴族相手に溜まった鬱憤の解消へと変わっていくのを、密偵達は察していた。最初のうちは少なからず警戒していた彼らも、天井裏にやってくる皇帝陛下の存在を受け入れるまでに、そう時間はかからなかった。

手洗い場にこもる時間が異様に長いことに言及しないのも、天井裏で正体に気づいていないふりをするのも、すべては大国を背負う若者に対する密偵達の気遣いだ。

そして一年前、天井裏に少女が加わり、その存在が皇帝の中で日に日に大きいものへ



と成長していく様子をも、密偵達はずっと微笑ましく見守ってきたのだ。

一方皇帝は、少女に想いを寄せながらも、彼女がどの属国の密偵であるかまでは把握できていなかった。本来ならば、祖国に帰る彼女を追いかけることも、ましてや先回りして待ち構えるなどという芸当も、到底不可能なはずだった。

それを可能にしたのは、一枚の小さな紙切れだ。少女が天井裏の密偵達に別れを告げた日の夜半、皇帝の寝室のテーブルにそれは置かれていた。

そこには、とある属国の名前が特徴の無い字で書き込まれ、その横には小さく小さく〝娘をよろしく〟との言葉が添えられていたのだ。

「おやっさんは、おチビちゃんが皇帝様のお妃になるのは賛成なんですかい？」

密偵の一人がそう問うと、少女の養父は眉間に深々と縦皺を刻んで「うぬぬ」と唸った。

「……脂ぎったスケベジジィにやるよりは、ましです」

その言葉に、他の密偵達も揃ってうんうんと頷いた。

「確かに確かに！　この上ない玉の輿ですしねぇ！」

「やあ、こりゃめでたい！　めでたい時には、やはり祝杯をあげませんとな！」

密偵の一人がどこからともなくボトルを取り出し、栓を抜いて周囲の者達に振る舞った。

「おおっと、これは……味も見た目も果実酒ですが、もしや？」
「そうです。酒精なしの果実酒もどき。飲んでも飲んでも酔いやしませんぜ」
「ほう、それはありがたい！」
酒精抜きの果実酒とは、つまりただのジュースではないのか？
などと口にする無粋な輩は天井裏にはおらず、皆ありがたがってボトルに口を付けた。
肴は、覗き穴から見える皇帝陛下と少女だ。
ところがその時、密偵達の視界にまた一人、新たな人物が割り込んできた。

「突然、誰とも知れぬお嬢さんを連れてくるなど、笑えない冗談はおやめください、陛下」
天井の下で両腕を組んでそう吐き捨てたのは、皇帝の腹心であるこの国の宰相だ。
右目の眼窩に片眼鏡を嵌めた彼は、先帝の年の離れた実弟――つまり、皇帝の叔父にあたる。
二つ年上の彼を兄のように慕い、全幅の信頼を寄せる皇帝は、連れ帰った少女をその素性も含めて紹介した。
とたんに、宰相の眉間に深い皺が刻まれる。
ただしそれは、少女が元々属国の密偵であることを知ったからではなかった。



「そんな後ろ盾のないお嬢さんを皇妃にするなどとおっしゃって、皆がはいそうですかと納得するとでも思っているのですか？」
なんと、皇帝は少女を側室ではなく、皇妃に据えると告げたのだ。
それには少女本人も、皇帝とともに彼女を連れ帰った参謀長も驚いた。
しかし、皇帝は彼らの困惑の視線などものともせず、さりげなく少女の肩を抱き寄せて続けた。
「結婚するのは私で、妻になるのはこれだ。何故、他人を納得させねばならん。この娘を皇妃に据える。これは、相談ではなく報告だ」
「あなたの立場では、そう簡単にはいかないと申し上げているのです。帝国皇帝陛下」
宰相は立ったまま抑揚のない声でそう告げると、皇帝の腕の中で戸惑っている少女を冷ややかに見下ろした。
「愛妾にしたいとおっしゃるのならば、大目に見ましょう」
少女の経歴に少々問題はあるが、一人くらい皇帝が本気で好いた女を側に置いていてもいいだろう、と思っているらしい。ただし、彼女に許されるのは愛妾という立場までだ。
「皇妃にはもっと別の……我が国の公爵家の姫君でも、隣国の王女でも、最悪山向こうの公国の末姫でもよろしいですが、とにかく、後ろ盾のある女性をお選びください」

「どの者も、城から追い出したばかりではないか」

少し前まで、城の奥に位置する後宮には、帝国の貴族の娘や敗戦国の姫達が何人も住んでいた。先の皇帝が、周囲から差し出されるままに受け入れてしまった結果である。

とはいえ、自らの皇妃に頭が上がらなかった先帝は、後宮に迎えた娘達を自分の愛妾ではなく、すべて当時の皇太子――現皇帝陛下の皇妃候補とした。

その中には、城の東西南北にそれぞれ屋敷を構える四つの公爵家の娘達も含まれていた。

年中戦場を飛び回る先帝から城を任されていた公爵達は、国政において大きな発言権を持っていた。その四家の力の均衡を保つためにも、先帝はそれぞれの家系から一人ずつ娘を迎え入れていたのだ。

しかし、そんな父や周囲の思惑をよそに、皇帝は後宮にいた娘達とは誰一人として深い仲になることはなかった。

公爵家から差し出された四人の令嬢達は我こそ皇妃にふさわしいと自負していたが、つい先日、他の娘達と同様に後宮から出されてしまった。結局皇妃は決まらぬまま、皇帝の手により後宮は解体されたのである。

「適当なのを呼び戻せばよろしいでしょうが」



「馬鹿を言うな」

涼しい顔をした宰相と憮然とした顔の皇帝。

髪はお揃いの黒色だが、前者が長く伸ばして背中に垂らしているのに対し、後者は毛先が肩に付くか付かないかという長さで切り揃えている。

また瞳も、宰相が淡褐色であるのに対し皇帝は琥珀色と、若干違った色をしていた。

そんな二つの瞳が火花が散らんばかりに睨み合う。その様を間近で見せられ、少女は困惑したが、皇帝と宰相の話に口を挟むような恐れ多い真似はできない。しかたなく置物にでもなった気分で口を噤んでいた。

少しして皇帝から視線を外した宰相が、少女をちらりと見てため息をついた。

「陛下はこの国の頂点にある方なのですよ。その隣に座るとなれば、相応の高慢さ――それこそ心臓に毛が生えているような女性でなければ務まりません。あっという間に周囲の悪意に潰されてしまいますよ」

宰相は何も後ろ盾の有無だけで、少女を皇妃に据えることに反対しているのではない。兄弟のように育ってきた皇帝を、宰相は親族としても友としても大切に思っている。そんな皇帝の愛する女性が、皇妃としての重圧や周囲の悪感情に苦しめられるのは気の毒だと案じているのだ。

しかし皇帝とてそれを承知で連れてきたのである。故に譲る気はなかった。
「心配無用だ。だいたい、自分の妻一人守れずに大国など守っていけるものか。これは私が潰させん」
「おやおや、大した自信ですね」
宰相は片眼鏡の位置を直すと、改めて少女の姿を眺めた。
小柄な彼女は長身の皇帝と並ぶと余計に小さく見え、その表情はあどけなくさえある。
「随分可愛らしい方ですが……もう成人を迎えていらっしゃるのですか？」
「十八の誕生日まで、あとたったの半年だ」
「なるほど。では少なくとも、半年後までは夫婦になることは叶いませんよ」
「……分かっている」
帝国では、婚約は基本的に何歳からでも可能だが、正式な婚姻や同衾が許されるのは成人を過ぎてからである。そのしきたりは、皇帝といえども守らなければならない。
宰相は立ったまま、しばし難しい顔をして何やら考え込んでいたが、やがて向かいのソファに腰を下ろして口を開いた。
「では、こうしましょう。このお嬢さんが成人を迎えるまでを試用期間といたしましょう」
「試用期間？」



訝しい顔をした皇帝に向かい、宰相は「ええ」と頷く。
「彼女をまず皇妃候補として公表します。もちろん、あちこちから不満の声が上がるでしょう。彼女に対する嫌がらせが始まるのは必至ですし、最悪暗殺者を差し向ける者もいるかもしれませんね」
「おいっ……！」
物騒な言葉に皇帝は眉根を寄せたが、当の少女は怯える様子もなく話に耳を傾けている。
宰相は、そんな少女の様子にかすかに目を細めて続けた。
「半年後の誕生日まで、陛下が彼女を守り切れれば、そして彼女が潰されずに陛下の隣に立っていられたならば、私も彼女が皇妃にふさわしいと認めましょう」
そして宰相の視線は、少女から扉の脇に控える参謀長へと移る。
「参謀長、いかがですか？」
「……自分も、閣下のおっしゃる通りにされるのがよろしいかと」
突然話を振られた参謀長は、一瞬逡巡した後、宰相の提案を推した。
自他ともに認める皇帝の忠臣でも、いや皇帝至上主義の彼だからこそ、突然現れた元密偵の少女を皇妃にするなど、そう簡単に認めることはできないらしい。要は自分が信

頼できない相手を皇帝の側に置きたくないのだ。

参謀長の鋭い視線に晒され、少女は少しだけ居心地悪そうに身じろいだ。

皇帝は彼女の肩を抱く手にぐっと力を込めると、宰相と参謀長の顔を順々に眺めて言った。

「他の誰に認められようと、お前達二人に認められないまま皇妃にしては、私もこれも安泰は得られんだろうな」

そして、小さく一つため息をついて、「いいだろう」と続ける。

「半年間、試されてやろうではないか。その代わり、その間皇妃候補として城に住まわせるのは彼女ただ一人だ。もう、女の姿絵をしつこく持ってくるのはやめろ」

前半の言葉は両名に、後半の言葉は宰相に向かって告げられた。

それに対し、参謀長は表情を変えないまま目礼し、宰相は苦笑を浮かべて頷いた。

そして、そんなやり取りを聞いていた少女もまた、心の中でなるほどと頷いていた。

帝国皇帝執務室の諜報活動から外され、次の派遣先まで決まっていた自分が、何故こうして帝国に連れ戻され、あまつさえ皇妃候補としてまつり上げられようとしているのか。その理由が、やっと分かったのだ。

任務の変更については、少女が帝国からのんびり帰国する間に、すでに皇帝と第二王



子との間で決定していた。ところが、帰国した途端慌ただしくとんぼ返りするはめになった少女には、第二王子から詳しい説明を聞く時間がなかった。

密偵に必要なのは、一を聞き十を知る力である。闇に潜んで単身敵陣に乗り込むこともあるのだから、現場で懇切丁寧に状況を説明されなくとも、自らすべきことを察しなければならない。

自らの判断で以って最善の行動をとること、その判断力こそが自らの命を生かすのだ。

帝国皇帝陛下は、属国の密偵と承知の上で少女を連れ帰ることを望んだ。故に彼女に課されたのは、帝国と祖国、双方承知の任務と考えていいだろう。

そして皇帝は今、少女をひとまず皇妃候補として城に置くことで、宰相に対し妙齢の女性の姿絵を持ってこないようにと命じた。皇帝が執務机に積まれる姿絵の束をひどく煩わしく思っていたことは、少女も天井裏から見ていてよく知っている。

玉座に就いてまだ三年。

皇帝は、今はまだ皇妃や世継ぎを得ることよりも、政務に専念したいのだろう。少女が皇妃候補として城に住まうことにより、彼は少なくとも半年間は煩わしい話題を回避できる。

つまり、自分の使命は帝国の皇妃候補を〝演じる〟ことであると、少女は結論を出した。

ただし半年後、宰相の言う試用期間が終わった時、自分はどういう身の振り方をすればいいのか。それだけは、まだ少女には判断が難しかった。だがそれについては、おいおい皇帝本人か祖国からの伝令により指示されるだろう。不安がないと言えば嘘になるが、そう思うことにする。

とにかく、これから半年間は、皇帝の心の平安を守るため、皇妃としてふさわしい振る舞いをし、宰相や参謀長に途中で蹴り出されることのないよう努めよう。少女はそう決意した。

優しい兄のような密偵は、帝国皇帝陛下だった。

天井裏で世話になっていた彼の役に立てると思うと、少女は少し嬉しくもあった。

しかしこの日から新たに始まった少女の生活は、天井裏で馴染みの密偵達に囲まれていた時のように、のんびりとはいかなかった。

皇帝の側に少女の存在があることが知れ渡るのは時間の問題だ。皇帝は下手に噂が広がり、人々にあらぬ憶測を立てられる前に、自らの口から彼女を正式な皇妃候補として発表することを望んだ。

そのため、少女は早い段階で公衆の面前に引っ張り出される。

それはなんと、帝国に戻った日の翌日のことだった。



帝国の城は、もともと四つの建物により構成されている。

その中心に立つ最も大きな円塔状の建物には、皇帝や宰相、および法務や財務といった各事務方の執務室が入っており、帝国の政策を話し合うための会議室なども設けられている。また上階には要人の私室もあり、最も人の出入りが多く、活気のある建物となっている。

その陰に隠れるようにして、裏門側に立っているのが後宮だ。

それから中央の建物に寄り添うようにして、表門から向かって右側に立っているのが、総司令官や参謀長以下、軍部要人の執務室などが入った軍部のための施設。そして、それとは対称の位置――表門から向かって左側に位置する建物は、賓客（ひんきゃく）のための宿泊施設になっていて、最上階には大規模な宴（うたげ）を催すための大広間が設けられていた。

その大広間にはこの日の夕方から、大勢の人間が集まっていた。

おのおの着飾って談笑しているのは、今宵の夜会に招待された帝国の貴族達だ。彼らは大陸一の大国となった自国を誇り、その栄華に酔いしれていた。

やがて夜の帳（とばり）が下りる頃、皇帝が姿を現すと、大広間は騒然となった。

皇帝の側に寄り添った、栗色の髪と翡翠（ひすい）色の瞳をした少女が何者なのか、その場にい

る者達にはまったく分からなかったからだ。
大広間の中央には、島のように白い絹で覆われた壇があり、周囲を色とりどりの花で飾られている。そこが夜会における皇帝の席である。その上にはゆったりとした長椅子と、様々な料理や酒を載せたテーブルが置かれ、壇のたもとには給仕たちが並んで皇帝の到着を待ちわびている。
しかし今宵、扉をくぐった皇帝の周囲にはいつにも増して人々が押し寄せ、彼はなかなか席まで辿り着けそうになかった。
「陛下、そちらのお嬢様はどなた様であらせられますか？」
一人の年嵩の貴族が、その場にいる全員を代表して尋ねた。
それに対して返した皇帝の言葉が、人々の混乱に拍車をかける。
「私の妻となる者だ」
「――な、何ですと!?」
「それは真でございますか、陛下!?」
先日まで後宮にいた多くの美女達が、誰一人として皇帝の心を掴めなかったというのに、突然現れた、まだあどけなくさえ見える少女がそれを成し遂げたというのだ。
その事実に人々は目を剥き、互いに顔を見合わせた。

続いて、彼らは少女の正体を突き止めようと躍起になった。
「このように愛らしい方を、陛下はいったいどちらでお見初めになられたのですか？」
「お嬢様、私めと、どこかでご一緒したことはありませんでしたか？」
もちろん、少女が平民の出であるばかりか、元々は属国の密偵であったことなど、彼らは知る由もない。
少女が纏った夜会用の衣装は、彼女の世話係に就いた侍女頭が急遽用意したものだった。
侍女頭はかつては皇帝の乳母をも務めた人物で信頼も厚く、特別に皇帝より少女の正体を明かされていた。故に彼女は、今は先帝とともに祖国で隠居生活を送る皇太后が、好きに使ってかまわないと残していった衣装や装飾品を手直しし、少女を一端の姫君のように仕立て上げたのだ。
幸い、この一年間の大半を暗い天井裏で過ごしていたせいで、少女の肌はまったく日に焼けておらず、透き通るように白い。また、天井裏は荒事が必要となる仕事場ではなかったため、少女の手指には荒れや目立つ傷はなく、深窓の姫君と言われれば「なるほど」と頷いてしまうほどにたおやかであった。
さらに、少女の立ち居振る舞いもなかなか堂に入ったものだった。



夜会前、少女の着飾った姿にひとまず及第点を与えた侍女頭は、続いて彼女に上流階級の行儀作法を叩き込もうとした。いくら綺麗に飾り立てても、それにふさわしい振る舞いをしなければ、隣に立つ皇帝の顔に泥を塗ることになる。皇帝を心より大切に思っている侍女頭にとって、そんな事態はあってはならないものだった。
しかし、彼女の心配は杞憂に終わる。
少女の養父は自身が優れた密偵であるだけでなく、教育者としても一流だった。どこに潜入しても怪しまれずに溶け込めるよう、娘には読み書きはもちろん、行儀作法も完璧に身につけさせていたのだ。
「もしや、山向こうの公国よりおいでではありませんか？」
「いや、これほど白く美しい肌をしていらっしゃるのだ。最北の山を越えた連邦国にも王女殿下がいらっしゃったはずだが……」
「しかし、翡翠の瞳は南端の同盟国の女王陛下と同じでいらっしゃる。もしや……」
人々の質問は、どれも遠回しなものだった。
何故なら、帝国を含む大陸の多くの国々には、決まった相手のいる女性に対してむやみに詮索してはならないという言い習わしがあるからだ。
それを盾に、少女は投げかけられる質問に是とも非とも答えずに、ただただしとやか

な笑みを浮かべて皇帝の傍らに寄り添っていた。

皇帝はそれを満足げに見やると、周囲に集まった人々に対して告げた。

「彼女はすべての柵を捨て、身一つで私のもとに嫁ぐのだ」

その言葉によって、周囲の緊張がひとまず緩んだ。

少女が家名や国の権威を背負わず嫁いでくるということは、彼女を迎え入れることで帝国が得る政治的な利益は特にないということを示唆している。これは国を治める者の婚姻にはあり得ないことだ。故に貴族達は、彼女は皇妃候補などではなく、皇帝が気に入ったというだけの、取るに足らない愛人であると判断したのだ。

安堵した彼らは冷静さを取り戻し、自分達が皇帝を足止めしていたということに気づいた。

ようやく皇帝と少女を取り巻いていた人々の壁が崩れ、中央の席への道が開かれる。

「……」

少女は一瞬、大勢の貴族達が作った花道に竦んでしまう。

無理もない。平民出の彼女にとって、夜会に出るのはもちろん、大理石でできた大広間の床を歩くのさえ初めてのことなのだ。自分の身を包む上質のシルクの感触や、その衣擦れの音にもまだ馴染んでいない。



だがすぐに、少女はそんな自分自身を叱咤した。最低でも半年間、帝国の皇妃候補をしっかりと演じなければならないという使命を思い出したのだ。

少女は不安や戸惑いを笑顔の下に押し込め、前を見据える。

すると、ふと顔を寄せてきた皇帝が、その耳元に小さく囁いた。

「こんな愛らしい姫君をエスコートできるなど、私は果報者だな」

その言葉に、少女は励まされた気がした。わずかに残っていた緊張さえも解けていく。

「もったいないお言葉でございます、陛下」

少女はしっかりと顔を上げ、皇帝に向かって感謝の気持ちを込めて微笑んだ。

とはいえ、皇帝の方は何も、密偵の少女を激励するためにお世辞を口にしたわけではない。彼は言葉通り、光の下で見る少女の姿を愛らしいと思っているし、彼女を堂々とパートナーとして隣に置けることを喜んでいるのだ。

それは、天井裏で逢瀬を続けているだけでは、叶わなかったことなのだから。

「行くぞ」

「はい」

皇帝は短く少女に声をかけると、彼女を連れて大広間の中央に向かって歩き始めた。

ところが、それを快く見送ることができない連中がいた。かつては皇妃候補として城

立ち読みサンプルはここまで



に住まいながらも、後宮の改修工事を理由に生家へ帰されてしまった娘達だ。

後宮を出る際、彼女達には皇帝より直々に婚姻の自由が与えられていた。つまりは、婚期を逃さぬうちに良い相手に嫁ぐようにという申し渡しである。それを受けてすっぱりと皇妃の座を諦め、別の者と結婚して幸せを掴んだ女性も少なくない。

しかし、それでもなお後宮の改修が済めば呼び戻されると信じる者達もいて、彼女達は皇帝の目に留まろうと、こぞって着飾り今宵の夜会に出席していた。

その内の一人、赤毛を結い上げた北の公爵令嬢は、手に持っていた扇をギリギリと握り締めて悔しさに身を震わせていた。

「どういうことなの!?　私を差し置いて、何故陛下はあんな小娘をっ……！」

「お、落ち着きなさい」

隣に寄り添った北の公爵が、必死に娘を宥めようとしている。

ひょろりと背が高く猫背気味の父親と違い、母親似の北の公爵令嬢は豊満な肉体とぽってりとした唇が色っぽい美女だ。しかしその性格は苛烈で、後宮に住んでいた頃は城の侍女達からも敬遠されがちであった。

「あんな子、陛下のお側には似合わないわ。思い知らせてやりなさい」

北の公爵令嬢は扇で口元を隠しつつ、取り巻きの女の一人にそう囁いた。



また別の場所では、金色の巻き毛の美女が、皇帝の後ろを歩く少女に眉を顰めていた。

「……見ない顔ですわね。属国の女でしょうか？」

彼女は南の公爵令嬢で、気位が高くて扱いにくいと、やはり城の侍女達の間で評判がよくなかった。

その彼女が、煮えくりかえる腸を知られまいと淡々とした口調で問うと、父親である南の公爵はたっぷりとした顎を撫でながらいやらしく唇を引き上げた。

「さぁな。わしにも見覚えはないが……なかなか愛らしい娘だ」

「……」

南の公爵の女好きは有名で、何を隠そうこの男こそが、少女が半年後に妾入りする予定になっていた帝国の貴族である。でっぷりとした腹と分厚い二重顎。せっかく綺麗に整えた髭も、その口元に好色な笑いを浮かべていては台無しだ。

南の公爵令嬢はそんな父親を軽蔑の眼差しでちらりと見たが、すぐに視線を少女に戻し、抑揚のない声で呟いた。

「……ふさわしくないわ」

そして、もう一人。

今宵のエスコートを務めた弟の肩を、ぎりぎりと爪を立てて掴んでいるのは東の公爵